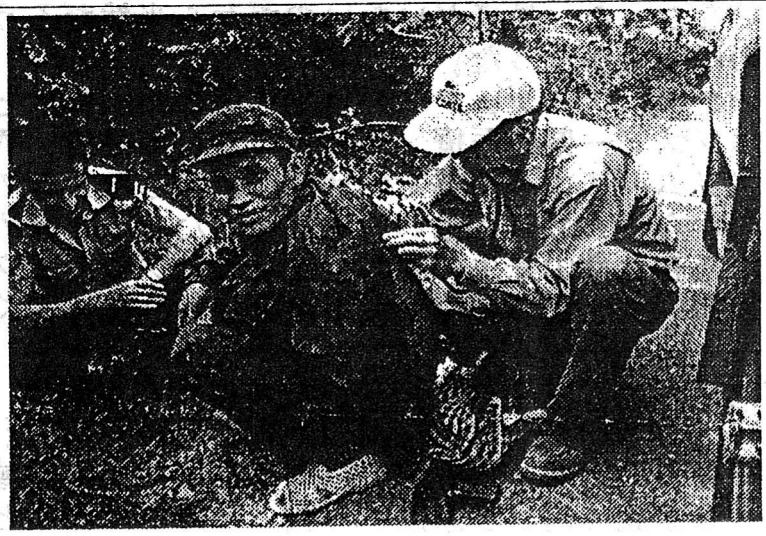

偶然、通りかかったパトロール中のポル・ポト派兵士（中央）を診察するAMDAの高橋央医師（右端）。左端はUNTACの文民警察官＝カンボジア・コンポン・スプー州で、野口写す

「ポト派兵士も診察します」

邦人医師高橋さんら3人

カンボジア

【プノンペン9日＝野口隆史】タイ国境からの帰還難民や国内避難民などを医療面で救援していこうと、アジア医師連絡協議会（AMDA、本部・岡山市、菅波茂代表）は、プノンペン南西部に隣接するコンポン・スプー州プノムスロイ地区で保健医療活動を先月から地区病院を中心に始めている。プノンペン政府側の住人だけでなく、ポル・ポト支配地域にも巡回医療を行っており、時にはパトロール中のポト派兵士の診察もする。

AMDAは八四年、「みんなが幸せに暮らすために、医師は何ができるのか」と、アジア十三カ国の医師四百人が連帯する国際医療組織として発足。今回、AMDAが提唱しているアジア多国籍医師団に賛同して、ロンドン大学熱帯医学研究所から派遣された日本人医師高橋央さん（三〇）ら三人が患者を診ている。

午前中は地区病院を利用して毎日五十人以上の患者を診察。午後から往診に出かける。医療開始から約一カ月。これまでに千人近く診たが、そのうちの大半がマラリア。肺炎、デング熱の患者も多いという。

最近診たパトロール中のポト派兵士三人は、末期肺がんであったり、肺炎、マラリアと重症だった。「病人だらけで、よく戦ってきましたね」と高橋医師。

この地域は八カ所の地雷原があり、毎月三人の負傷者が出るほか、ポル・ポト派の支配地域が多く、プノンペンの近くなのに、これまで非政府組織（NGO）の活動で手がつけられていなかったという。

高橋医師らは、治療の一方で蚊帳に殺虫剤を染み込ませる防蚊対策を住人に施したり、紙芝居で保健衛生の知識を普及している。

現在、郵政省の国際ボランティア貯金の助成金でやりくりしているが、高橋医師は「想像以上に病人が多い。薬代もかかり、資金の余裕が無くなってきた」と募金参加を呼びかけている。

問い合わせはAMDA日本支部（〇八六二―八四―七六七六）。